

事業評価報告書（事業完了報告書）

- ◆ 事業名：自然と人間の共存を目指し、公園現場事務所を拠点とした、コミュニティ・国立公園協働活動促進手法の深化と普及（インドネシア）
- ◆ 事業実施団体名：一般社団法人あいあいネット
- ◆ 事業実施期間：2012年12月～2016年11月
- ◆ プロジェクト目標：国立公園地域の生物多様性保全と周辺コミュニティの生計向上とが両立する活動が持続的に進められ、協働活動促進の手法がモデルとして確立・普及する

1. 妥当性

ターゲットグループおよび対象地（第一義的に西部バリ国立公園事務所と周辺の村、およびピアサポートの対象としての同国立公園近隣の国立公園・自然保護地域）の選定は適切であった。西部バリ国立公園とは実施団体が2008年から協働して活動しており、相互理解・信頼があった。また周辺村の住民の多くは公園の自然資源に依存して生計を立てており、自然と共生した生計向上の実現は村人にとって重要な課題であった。また周辺の国立公園・自然保護地域も西部バリ国立公園と同様の課題を抱えており、西バリ式コミュニティ・ファシリテーションの手法を広げていく上で適切な選定だった。

コミュニティファシリテーションの研修を実施し、ファシリテーターの村での活動を側面から支援する、という計画の骨格は、現地のイニシアティブを引き出し、持続的な活動を作っていく上で適切であった。このプロジェクトの核をなすコミュニティファシリテーション手法の有効性は各村で多くの住民イニシアティブが引き出されたことから明らかである。一方、この手法を他の国立公園へ広げていく計画についても、環境林業省本省からも支持され、周辺の3つの国立公園でピアサポートが始められたことから、適切であったと考えられる。

なお、インドネシア政府は国家中期開発計画において環境保全を国家的重要課題の一つとして位置付けているが、環境林業省では国立公園の協働管理や地域住民の経済向上と両立した自然環境保全を目指しており、本プロジェクトはこうした政策とも整合的であった。

外部条件として環境林業省による自然保護地域での地域協働促進の政策が変わらないこと、活動地の地方政府が国立公園との連携に積極的であることが挙げられたが、どちらもその通りであり、プロジェクト期間中、国も地方政府も、自然と共生した地域振興の実現に積極的な姿勢を示した。また研修を受けた職員が他の国立公園に異動しないことも外部条件の一つだったが、20名のコミュニティファシリテーション研修参加者中、異動は3名のみであり、これも認識として適切であったと考えられる。

プロジェクト目標のうち、コミュニティ・国立公園協働活動手法のモデルとしての確立については、計画とアプローチとも適切であり、自然と共生した地域振興に向けた協働を促すコミュニティファシリテーションの手法を深化し確立することができた。一方、同手法の普及については、当初のアプローチ（西部バリ国立公園職員が研修講師となって他の国立公園で研修する）は公園職員の能力および相手の国立公園の受け入れ事情から考えてあまり適当ではないことが判明したため、途中で公園同士の学びあいと現場での助言を中心とするピアサポートの手法に切り替え、これを通じて普及を進めることができた。

2. 実績とプロセス

4つのアウトプットはほぼすべて達成された。アウトプット2の中で公園と住民等との間でMOUを交わす目標については、MOU締結に予想外の時間と手間がかかることが判明したことから、まず合意書を交わして村行政との関係を深めていく形に切り替え、一つの村では合意書が締結された。村のマスタープラン策定についてもすべての村で作業が開始されるとともに、プリンピンサリ村では自然環境保全のための村条例制定が準備された。

また実施計画についても、予定通りの投入と期間ですべて行われた。ただ、ピアサポートの実施については、上述のように手法の変更があったため、当初計画より若干の遅れが生じたが、最終的にアウトプットは達成された。なお、アウトプット2に関わるグッドプラクティス事例調査については、日本での学びや日本側との双方向の学びあいがあると判断されたため、当初計画を変更して3回の実施となった。

以上を含めて、投入した資金と労力と比して、十分以上の実績が達成されたと考える。特に西部バリ国立公園周辺村では、日本からの資金投入なしで、住民のイニシアティブによる活動が数多く生まれ、住民自身の労力や資金で活動が継続するとともに、国立公園による国費を使つての支援が行われている。この点からも、このプロジェクトは **cost-effective** であったと言える。

3. 効果

「国立公園の生物多様性保全と周辺コミュニティの生計向上とが両立する活動が持続的に進められ、協働活動促進の手法がモデルとして確立・普及する」という目標は十分に達成された。周辺コミュニティでは数多くの「自然と共生する生計向上」活動が住民主導で進められ、持続的に展開している。そしてそれを促進したファシリテーション手法は **FMBB**（西バリ式コミュニティファシリテーション）として整理され、環境林業省自然資源生態系保全総局を通じて他の国立公園にもモデルとして紹介されている。さらにピアサポートを通じてこの手法が周辺3つの国立公園に伝えられ、住民への寄り添う活動が始まっている。

周辺コミュニティでの「自然と共生する生計向上」活動は、事業で取り組んできた、国立公園現場職員のファシリテーション能力の育成と、そこで育成されたファシリテーターによる継続的な村への働きかけが功を奏したことは明らかである。公園職員がそれまでの「上から」「外から」の持ち込み型アプローチを変え、村人と信頼関係を構築し、村人とともに地域資源を活用して課題解決を考えようとするファシリテーションがなければ、これらの活動は生まれなかった。またこうした成果をあげられたことで、**FMBB** の手法が本省でも注目され紹介され、さらにピアサポートという形で周辺国立公園に普及していくことに繋がった。またグッドプラクティス事例調査を通じて日本とインドネシアで同様の課題解決に取り組む現場から学んだことが、西部バリ国立公園周辺の村での住民との新しい協働に繋がった。そして周辺コミュニティだけでなく、関係する自治体や企業等も巻き込んだ協働の体制を作っていくことが、より持続的な活動の構築につながった。

変化の促進要因としては、西部バリ国立公園の職員が自発的に動こうというボランティアな精神を持っていたことと、公園の管理職（事務所長および課長）がコミュニティファシリテーションの手法をよく理解し、それを支援する体制を作れたことがある。また環境林業省本省でも自然保護と生計向上を両立させた地域づくりへ協力しようという政策が生まれたこと、そしてジュンブラナ県、ブレレン県どちらも西部バリ国立公園周辺の村落観光振興に積極的であったことが外部要因として挙げられる。

変化の中身として、まず公園現場職員の変化としては、何よりも「村人と対等な信頼関係を作る」ことの大切さを、研修を受けた職員だけでなく、それ以外の職員も含めてよく理解して、それを実践していることが挙げられる。多くの職員が、村人と同じ目線に立って、村の状況と課題を共に考え、具体的な活動に寄り添っていく、というファシリテーションの基本を実践できるようになった。今では公園所長自身が「外からプロジェクトを持ち込むのではなく、上から何かを指示したり援助したりすることもせず、信頼関係を構築して、村人に寄り添うことが重要である」と理解して、それを公園全体のモットーとして進めようとしている。

公園職員の変化でもう一つ興味深いのは、グッドプラクティス事例調査（GPCS）参加後の活動である。スラバヤ市のゴミ銀行の活動、ジョクジャカルタの有機肥料作成による有機農業振興、日本の豊岡での地方行政や関係諸団体との協働による地域振興活動、同じく

佐渡での住民主体の生息地保全活動は、それぞれギリマヌクのゴミ銀行、スンプルクランポックの農民グループ・畜産グループの活動、ブレレン県とジュンブラナ県行政や民間企業への働きかけ、そして各村の小学校での現場型環境教育活動に活かされている。問題意識をもって他地域他国の事例に触れ、そこから学んだことは、帰国後の自分の現場で活かしていける、ということが言えるのではないかと思う。

村レベルでの変化については、西部バリ国立公園周辺村すべてで自然と共生した生計向上を行う住民グループが数多く結成され、公園と協働して活動が展開している。それらの活動は住民グループ単独ではなく、村や県の行政、民間企業等も巻き込んだ形になっている。そして西部バリ国立公園周辺地域全体の変化として、カンムリシロムクをシンボルにして、自然と共生した地域づくりを関係者全員で取り組んでいこう、という機運が生まれてきている。各村でカンムリシロムクの飼育下繁殖と野生復帰に取り組もうとする住民グループが生まれるとともに、村行政と県や州、民間企業も含めた村の保全観光村としての振興を目指すマスタープラン作りも始まった。

最後に西部バリ国立公園外での変化について。ピアサポートを実施しているグヌンリンジャニ、メルブティリ、バルランの3国立公園では、現場職員たちがFMBBのやり方を学び、村人とのパートナーシップ構築や「あるものさがし」の活動を開始している。グヌンリンジャニ国立公園では、トレッキングや川下りのガイドをする若者グループや農業者グループへの寄り添い活動が始まった。一方、環境林業省本省では、事業開始前はごく一部の担当者が西バリの活動に関心を示しただけだが、活動の成果が積み重なることで、国立公園を管轄する管理地域局全体の中で、西バリ式コミュニティファシリテーションが高く評価され、自然と共生した地域づくりの取り組みの先進事例として、他の国立公園へ紹介されるようになってきている。FMBBを職員研修の中に取り入れる動きも始まっている。

4. 持続性

まず西部バリ国立公園におけるコミュニティ・ファシリテーションの継続については、既に公園内で組織的な整備が始まり、次年度予算への必要経費の組み込みも行われている。さらに各村の住民グループの活動は、もともと自主的に独立採算で行われており、プロジェクト期間後も継続していくことが想定されている。さらに各村レベルで村落観光振興に向けた委員会の設置と、関係者を巻き込んだマスタープラン策定も始まっており、今後は村と公園とが協働しながら自然と共生した地域観光振興に取り組むことが予想される。

なお公園と実施団体との間のMOUは2017年まで継続していることから、実施団体として今後1年、自己資金を使いながら、公園と周辺地域との協働活動の持続に向けた体制整備に協力していく。

他の国立公園へのピアサポートについては、今後も西部バリ国立公園からのフォローが必要である。基本的に両国立公園間の調整で実施されるが、必要に応じてあいあいネットの現地専門家が助言する計画である。また相手の国立公園側の予算獲得が間に合わない場合は、実施団体が資金調達して支援することも考えている。

西バリ式コミュニティファシリテーションの全国への普及については、研修の実施やファシリテーター認定制度等、今後の環境林業省による施策が必要である。これについても、できる限り実施団体としてフォローしていく計画である。

5. 市民参加の観点からの実績

本邦研修で西バリからの一行が日本を訪れた際は、訪問先で相手の活動を視察するだけでなく、市民グループや行政の方たちを対象に、自分たちの西バリでの活動について報告する機会を設けてきた（豊岡市、佐渡、吉野熊野国立公園）。また横浜国際フェスタ（2015年）およびJICA横浜の会場（2013年、2014年）、あいあいネットの移転先である関内フューチャーセンター（2016年）を使って草の根プロジェクト（西バリ）の活動報告も行っている。さらにあいあいネットが参加した地域の催し（生田緑地を会場としたフェスタ等）

でも西バリの活動写真を展示して、カンムリシロムクをテーマに子ども参加の企画も行った。またあいあいネットの作成する年次報告やニュースレターにも毎年報告を載せる他、日本インドネシアネットワーク（JANNI）が発行するニュースレターでも西バリの活動を紹介した（2013年3月）。さらにあいあいネット代表が教員を務める明治大学専門職大学院ガバナンス研究科の紀要でも西バリでのファシリテーション事例が紹介されている（2016年3月）。

2016年2月には佐渡でトキの生息地保全等に取り組む市民12名が西バリを訪問して経験交流を行った。ここでは西部バリ国立公園職員から現地での活動を紹介されるとともに、スンプルクランポック村、ギリマヌク村、ブリンビンサリ村を訪問して住民グループと交流した。国立公園所長と佐渡の市民グループリーダーは、「自然と共生した地域を作っていくためには、我々全員の考え方の変革が必要だ」と意気投合した。また佐渡の人たちは、自分たちの取り組みが世界的にも重要なことであり、西バリにも志を同じくする住民や公園職員がいる、ということで活動のエネルギーをもらったようだ。

この他にも、兵庫県豊岡市や横浜市で自然と共生した地域づくりに取り組む市民グループと西バリとの交流が生まれており、今後はそうした地域とも学びあいの活動を展開していくことが期待できる。

なお、市民との直接交流ではないが、当該事業の実施にあたっては、横浜市の環境創造局の職員に2回、現地を訪問してもらい、協働の促進について助言をもらった。同市環境創造局動物園課では、カンムリシロムクの保護と野生復帰について西部バリ国立公園と長年の協力関係を結んでおり、当該事業でも、適宜アドバイスを受けている。

草の根技術協力事業を実施したことによる実施団体へのインパクトとしては、何よりも上記のように日本の各地で自然と共生した地域づくりに取り組む市民団体や行政とつながることができたことが挙げられる。当会は「地域づくりに取り組む同士の現場での学びあいの創出」を一つのミッションとしており、その実現に大きな一助となっている。また、インドネシアにおける国立公園協働活動促進について経験を積むことができたため、他の技術協力プロジェクト（インドネシアのREDD+プロジェクト、ベトナムの参加型農村開発プロジェクト等）への専門家派遣や本邦研修受入にもつながっている。

6. グッドプラクティス・教訓・提言等

<エピソード>

西部バリ国立公園職員15名から「どのように住民のイニシアティブを引き出してきたか、何がポジティブな変化のポイントとなったのか」について聞き取りを行い、その結果について取りまとめ中だが、そこでは職員たちが、いかにして旧来の考え方から脱して、FMBBのアプローチを実践してきたか、そのプロセスが語られている。そこからは、まず「何も村には持ち込まず、約束もせず、ともかく仲良くなって、話を聴き、一緒に考える」というコミュニティファシリテーションの基本を職員たちが斬新なものにとらえたことがわかる。それまではプロジェクトが先にあって、村人に何かを配ったり教えたりすることが中心だった。FMBBはそれと全く反対である。果たしてこれでうまくいくのか、多くの職員は最初は半信半疑だった。しかし足繁く村に通い、村人の話を聴くようになると、村人は次第に打ち解け、いろいろな話をしてくれるようになる。そしてある時（場合によっては半年から一年後に）、村人から、「実は〇〇をしたいのだが・・・」と打ち明けられる。村人のイニシアティブが生まれた瞬間である。そこに至るまでに実は多くの時間がかかったのだが、職員たちはそれを「無駄」とは全く考えていない。何より、その後の村人の動きはどの事例での大変迅速で、かつ活発であったからだ。それまでじっくり時間をかけて相手と信頼関係を構築してきたことで、その後の活動の展開にしっかり寄り添うことができて、との自信を多くの職員が持っている。

村人の変化を物語るエピソードは数えきれないほどあるが、印象的なのは、以前は国立公園と敵対していた村人の変化である。スンプルクランポック村でカンムリシロムクの密

猟に関与していた D 氏は、国立公園職員の S 氏、N 氏から何度も「カンムリシロムクの飼育下繁殖ができるようになりました。一緒にやりましょう」と聞かされても、なかなか信用できなかった。しかしあまりに何度も足を運ばれて、熱心に言われるので、これは信用してもいいかもしれない、と思い、飼育下繁殖の研修に参加したという。その D 氏は今ではカンムリシロムクの野生復帰を促進しようと頑張るグループの一員であり、密猟に関わっていた昔のことを苦い思い出として語っている。また同じ村で違法伐採に長年携わっていた S 氏は、公園職員の D 氏と J 氏が足繁く通ってきても、1 年間は何も反応せず、世間話だけをしていた。生計の話になって、「農業だけでは食べていけないんだよなあ。だから森から木を切って売ってるんだ」とは言ったが、それに対してどうしよう、とは S 氏自身も、公園職員の D 氏や J 氏も何も言わなかった。そうした中である時、「公園の自然を活用して何ができるかを考える」という集まりが村であったのだが、その時 S 氏は突然立ち上がって、「公園のトレッキングガイドをやりたい。そうすれば、今やっていることをやめても収入を増やせる」と言った。違法伐採者が「元」違法伐採者になり、住民によるトレッキングガイドグループが生まれた瞬間である。その後の S 氏のグループ活動は大変活発で、今ではトレッキング道周辺の整備やゴミの清掃活動を行うとともに、カンムリシロムクの飼育下繁殖と野生復帰にむけて動き始めている。

<グッドプラクティス・教訓>

「村人とパートナーシップを構築し、何も持ち込まず、話を聴き、一緒に考える」というファシリテーションの基本を身につけて、村人と継続的に関わっていくことで、自然と両立した生計向上活動に取り組もうとする村人のイニシアティブを引き出すことが可能である。そしてこの方式は、西部バリ国立公園だけでなく、他の国立公園・自然保護地域でも必要であり、かつ実践可能である。そしてこのファシリテーション能力は、西部バリ国立公園からのピアサポート（相互訪問、パラダイムシフトのための短期研修、現場での助言）によって他の国立公園・自然保護地域で働く現場職員に伝えることが可能である。

日本を含めて、他地域の事例から学ぶことは有効である。特に自らが直面する課題に意識的であり、何を学びたいかを明確にしている場合には、いわゆる「グッドプラクティス事例調査」は効果的である。もちろん、学んだ後に、それを具体的にどう活かしていくか、アクションプランを立てて、それをフォローすることも重要である。

この「学び」は一方通行のものではない。本邦研修で訪問した豊岡、佐渡、吉野熊野国立公園等では、それぞれで活動する住民グループや行政機関の方々が、西部バリ国立公園での住民との協働をめざした活動について、関心をもち、「自分たちの抱える課題と同じ」「西バリのことをもっと知りたい」という反応を示してくれた。そして佐渡からは 2016 年 2 月に 12 名が西バリを訪れて経験共有を行った。「自然との共生」「地域振興」という同じ課題を抱える者同士のまなびあいはこれから大いに必要とされている。

<今後に向けた提言>

まず当該事業の今後の展開としては、2017 年まで実施団体と西部バリ国立公園との協力協定が継続していることから、同公園周辺での住民や関係団体との協働を通じた地域づくりに引き続き協力していく計画である。またピアサポートを通じた他の国立公園へ西バリ式コミュニティファシリテーション手法の普及についても、継続して支援する予定である。しかしながら、他の国立公園への普及に関しては時間がかかることであり、環境林業省中央からのバックアップも必要とされ、この点で、JICA インドネシア事務所からの側面支援があると望ましいと考える。

また、2018 年度以降についても、西部バリ国立公園においてすべての村が協働して「カンムリシロムクが飛び交う地域」として自然環境保全と観光振興をリンクさせた活動を、県や州政府、関連企業も巻き込みながら展開していくことが望まれる。その時には国立公園が一つの要となり、より協働を深化させていく役割を担うことが求められる。一方、こ

こうしたコミュニティファシリテーションの手法を全国に広げていくために、ピアサポートの方式を確立させるとともに、環境林業省本省を通じた全国展開の可能性を探ることも必要である。環境林業省は「Konservasi untuk masyarakat (住民のための保全)」という標語のもと、環境保全と経済向上の両立した活動の展開を重視しており、西バリ式コミュニティファシリテーションの手法は大変重要な役割を果たせると考える。

住民の主体性を引き出しながら、関係者の協働による活動を促進するコミュニティファシリテーションの手法は、インドネシアの国立公園・自然保護地域のみならず、同国で住民参加型の開発現場では大変効果的なものであると考えられる。また同手法は既にベトナムの技術協力プロジェクトにおいて普及が試みられているが、それ以外にも、他国の技術協力プロジェクトや、日本での課題別研修を通じて適用・普及されていくことが可能であると考える。

実施団体の一般社団法人あいあいネットは世界各国の地域づくりの現場をつなぎ、実践者同士のまなびあいを促進することをそのミッションとしている。当該草の根技術協力プロジェクトを実施して見えてきたことは、自然と共生した地域づくりはインドネシアと日本、それぞれの国の多くの地域で重要な課題と認識され、多くの関係者がその実現に向けて動き始めていることである。今後は西バリを拠点としながら、日本とインドネシアの実践現場をつなぎ、まなびあいの活動をより深めていくことが実施団体として大きな目標となった。

前述したように横浜市環境創造局では、カンムリシロムクの保護と野生復帰について西部バリ国立公園と継続した協力を行ってきた。当該プロジェクトを通じて現地でのカンムリシロムク飼育下繁殖が住民の手によって進められ、複数の地域で野生復帰に向けた動きが始まっている。こうした状況から、今後は横浜市と実施団体との連携をさらに強め、カンムリシロムクが飛び交う地域づくりに向けた、協働の動き作っていければと考えている。また、地域住民を巻き込んだ形で自然環境保全と地域振興を進めていくという課題は、日本各地の国立公園地域でも重要な課題となっている。今後は環境省自然環境局国立公園課や各地の国立公園との連携も目指していきたいと考えている。

以上

【活動の写真】



バルランでのピアサポート



グヌンチレマイ国立公園でのGPCS



プジャラカン村のマングローブトレッキング道



スンプルクランポック村水管理グループ



スンプルクランポック村トレッキングガイド



ギリマヌク村のゴミ清掃活動



ブリンビンサリ村での資源地図発表



吉野熊野国立公園での GPCS



豊岡田結湿地訪問 (GPCS)



佐渡の斎藤農園訪問 (GPCS)



西バリを訪問した佐渡からの一行

活動計画実績表(事業完了報告書)別紙

- ◆ 事業名: 自然と人間の共存を目指し、公園現場事務所を拠点とした、コミュニティ・国立公園協働活動促進手法の深化と普及(インドネシア)
- ◆ 事業実施団体名: 一般社団法人あいあいネット
- ◆ 事業実施期間: 2012年12月～2016年11月
- ◆ プロジェクト目標: 国立公園地域の生物多様性保全と周辺コミュニティの生計向上とが両立する活動が持続的に進められ、協働活動促進の手法がモデルとして確立・普及する

Output	活動内容(Activities)	活動実績(累積)
1. 国立公園や自然保護地域の現場事務所に配属された職員によるファシリテーション能力が向上する	1-1 西部バリ国立公園の4か所の現場事務所職員を対象とした、ファシリテーション能力育成研修を実施する	2013年4月～8月にかけて、コミュニティ・ファシリテーションに関する研修を西部バリ国立公園の現場職員20名を対象に実施。10名ずつがそれぞれ1週間×3回の研修を受けた。内容はパートナーシップ構築、コミュニティに対する見方、外部者の役割、課題分析の方法等。座学とフィールドでの実践を組み合わせたもの。参加者は研修と研修の間の時期にも自分の現場で試行することが求められた。
	1-2 数か所の国立公園又は自然保護事務所の所長らとファシリテーション能力向上研修の実施について協議・準備を行う	2013年9月にバリ州自然資源保全事務所、東ジャワ州内のメルプティリ国立公園、バルラン国立公園、アラスプルヲ国立公園をプロジェクトチームが訪問し、ピアサポート実施に向けて、西バリ式コミュニティファシリテーション(FMBB)の手法の紹介を行った。その中で強い興味を示したメルプティリ国立公園、バルラン国立公園とは、その後も継続的なコンタクトをとった。一方、2016年4月に西部バリ国立公園の課長でプロジェクトチームのリーダーである Seno Pramudita氏が西ヌサトゥンガラ州のグヌンリンジャニ国立公園に異動となり、そこから同国立公園とのピアサポート実施に向けた協議が始まった。
	1-3 上記国立公園等に西部バリ国立公園で育成されたファシリテーターを派遣し、或は上記公園等からの職員を受け入れて、ピアサポートを実施する	まず2014年6月にデンパサールの自然資源保全事務所において、15名の西バリ公園チームを対象にピアサポートの手法についての第一回ワークショップを行った。また同年10月～11月、2015年1月～2月には西カリマンタンのグヌンバルン国立公園で行われた職員ら対象のファシリテーション研修に西バリ国立公園から計7名の職員が参加し、アシスタントファシリテーターとして、ピアサポートの試行を行い、同年4月と10月にはその振り返りのワークショップを実施。こうした経験をもとにピアサポートの進め方について整理を行い、2016年3月にメルプティリ国立公園、4月にバルラン国立公園、そして6月にグヌンリンジャニ国立公園にてピアサポート第一フェーズを実施、それぞれ16名、12名、16名の各公園職員が参加した。その後8月～9月にかけて、メルプティリとグヌンリンジャニの両国立公園職員に対しては西

		<p>部バリ国立公園にて、バルラン国立公園職員対象には同国立公園を会場にして、ピアサポート第二フェーズのキックオフ研修(パラダイムシフト)を実施、それぞれ4名、9名、10名の現場職員が参加した。</p>
<p>2. 周辺コミュニティの抱える課題と利用可能な資源が明らかになり、その課題解決にむけて、自然と共存する生計向上活動がコミュニティのイニシアティブで開始される</p>	<p>1-4 上記の研修を実施した国立公園等に対して、定期的な情報交換・モニタリングを行い、必要に応じて助言を行う</p> <p>2-1 ファシリテーション研修を受けた現場職員が、周辺コミュニティとパートナーシップを構築し課題分析や地域資源に基づいた活動イニシアティブを生み出す。</p> <p>2-2 国立公園及びその周辺の自然資源について、周辺住民が自ら調査し、生計向上と環境保全とを調和させた村のマスタープランを策定する</p>	<p>ピアサポートの第3フェーズとして、研修を受けた現場職員に対して直接アドバイスをするため、西部バリ国立公園から職員をそれぞれの国立公園に派遣する計画であり、2016年11月に3名がグヌンリンジャニ国立公園へ4日間派遣された。</p> <p>西部バリ国立公園周辺6つの村すべてで、ファシリテーション研修を受けた現場職員が、それ以前にファシリテーションの経験を積んだ現場職員とともに、村人とのパートナーシップ構築を行い、課題分析を行った。その結果、それぞれの村で次のような村人の主体的な活動が開始された。</p> <p>スンプルクランポック村:元違法伐採者らによるトレッキングガイドグループ、公園内の水源から水を引く水資源管理グループ、有機肥料を使った農業・畜産グループ、小学校における実践的な環境教育</p> <p>プリンビンサリ村:村落観光振興委員会によるグロジョガン滝の整備とホームステイ、村の特産品開発グループ、小学校における実践的な環境教育</p> <p>ギリマヌク村:ゴミのリサイクルグループ(ゴミ銀行)、住民と行政、企業によるゴミ管理活動、漁民グループによるマングローブ保全と観光振興、手工芸品を活用した特産品土産物を運営するグループ</p> <p>ブジャラカン村:ボート事業者やガイドらによるマングローブ再生・観光振興に向けたフォーラム、ヒンドゥー寺院を管理する住民による森林火災予防活動</p> <p>エカサリ村:カンムリシロムク繁殖グループの結成</p> <p>ムラヤ村:カンムリシロムクの餌となるコオロギ繁殖家グループの結成</p> <p>なお、上記の活動の過程で、地域の資源マップがスンプルクランポック村とプリンビンサリ村で作成された他、地域の特産品や伝統的な技術を持つ職人の存在調査がギリマヌク村とプリンビンサリ村で、マングローブ林の現状調査がブジャラカン村で、住民によって行われた。</p> <p>スンプルクランポック村では、カンムリシロムクの生息地保全に向けて繁殖家グループを中心に植樹計画が立てられ、一部は開始されている。同村では県から保全観光村の指定を受けて、観光振興のための委員会が国立公園の協力で設立され、自然資源の保全のための村条例の制定を準備している。</p> <p>プリンビンサリ村ではカンムリシロムクの飼育下繁殖と野生復帰を進めるため、自然環境保全のための村条例のドラフトが作成され、村長を中心に12月末の放鳥に向けた準備を進めている。</p>

		<p>ギリマヌク村ではゴミの管理を進めるため、村行政が計画策定を開始した。 これに加えて、6つの村で国立公園も協力して州・県の観光局と協働で観光振興に向けたマスタープラン策定の作業が始められている。</p>
	<p>2-3 自然と共存しながら生計を向上させる活動を学ぶため、インドネシア・日本のグッドプラクティス事例調査及び本邦研修を実施する</p>	<p><日本でのGPCS> (1) 2013年10月～11月、西部バリ国立公園から5名が参加して豊岡、阿蘇くじゅう国立公園、横浜を訪問。自然と共生した地域振興と行政の役割について事例調査を行った。 (2) 2014年9月～10月、西部バリ国立公園から5名が参加し、豊岡、佐渡、横浜を訪問。豊岡では西バリの活動も報告し、双方向の学びあいを実施。佐渡では住民主体の環境教育や農業振興の実践を調査した。 (3) 2015年9月～10月、西部バリ国立公園から5名が参加し、吉野熊野国立公園(新宮エリア)と佐渡、横浜を訪問。新宮では住民との協働を進める国立公園の役割について学び、佐渡ではお互いの活動についての交流を行った。</p> <p><インドネシアでのGPCS> (1) 2013年9月と12月に西部バリ国立公園から6名が参加して、スラバヤ市の住民グループによるゴミリサイクル活動と、住民によるマングローブ再生保全・ツーリズム活動を視察。それぞれギリマヌク村での活動展開に繋がった。 (2) 2014年3月に西部バリ国立公園から6名が参加して、グヌンリンジャニ国立公園を訪問。村人による観光振興と国立公園との関係について学んだ。 (3) 2015年8月、西部バリ国立公園から7名が参加して、ジョグジャカルタ特別州スレマン県を訪問。有機農法の普及に取り組む住民グループの活動を学び、スンプルクランポック村での農業・畜産グループの結成につながった。 (4) 2016年9月、西部バリ国立公園から8名が参加して、西ジャワ州のグヌンチレマイ国立公園を訪問。住民のイニシアティブを引き出す国立公園のマネジメントと、住民による観光振興について調査した。</p>
	<p>2-4 国立公園と周辺コミュニティとが自然と共存した生計向上活動の推進についてMOUを結び、協働活動を推進する</p>	<p>プリンビンサリ村では、カムリンシロムクの飼育下繁殖と野生復帰を協働で進めるため、村行政と国立公園の間で話し合いが進み、MOUの前段階である合意書が締結された。また同村ではグロジョガンの滝エリアの整備について、県の観光局および村行政との間でMOUを結ぶ可能性が検討されている。 スンプルクランポック村の水管理グループ(Subak Abian)と国立公園の間で、水源地の管理についてMOUを結ぶ動きが進んでいる。 ギリマヌク村では村行政と電力会社および観光企業と協力したゴミ置き場の整備活動が進め</p>

		られているが、これについて関係者の間で合意書を交わす動きがある。
3. 周辺コミュニティの課題解決や生計向上に重要な意味をもつステークホルダーと住民および公園事務所との関係が構築され、協力しあえるようになる。	3-1 西部バリ国立公園の職員が、ジュンブラナ県、ブレレン県、およびパリ州の関係各局、および同公園周辺で活動する観光関連企業に対して、住民との協働活動促進に関する協力を要請する	国立公園職員が住民との協働活動促進に関して協働関係を結んだ対象は次の通り。 1) パリ州(観光局:プリンビンサリ村の観光振興) 2) ジュンブラナ県(プリンビンサリ村およびギリマヌク村の観光振興、この2村に加えてムラヤ村とエカサリ村での観光振興に関するマスタープラン作成) 3) ブレレン県(協働に関するワークショップ開催、スンプルクランポック村の保全観光村振興) 4) グログック郡(プジャラカン村のバニュウェダン温泉の整備) 5) ガス火力発電所(ギリマヌク村のゴミ処理) 6) ワカショレア(リゾートホテル:ギリマヌク村のゴミ処理) 7) プジャラカン村で活動するボート業者、ガイド、商店(国立公園との協働フォーラム結成) 8) バニュワンギ県(東ジャワ州):西部バリ国立公園と周辺の観光振興
	3-2 上記ステークホルダーと、関係するコミュニティとの定期的な話し合いの場を設けるとともに、協力関係の促進を図る	定期的な話し合いの場として、次の会合が設けられている。 A) 周辺6つの村の観光振興マスタープラン作成 B) 国立公園環境サービス協働フォーラム(プジャラカン村) C) ギリマヌク村のゴミ処理に関する関係者会合 D) グロジョガン滝エリアの整備に関する関係者会合(プリンビンサリ村)
4. 西部バリ国立公園での「現場事務所を拠点としたコミュニティ・国立公園協働活動促進手法」が他の国立公園に普及する	4-1 西部バリ国立公園における「現場事務所を拠点としたコミュニティ・国立公園協働活動促進手法」の内容および研修のプロセスを報告書にまとめる	研修のプロセスはあいあいネットが林業省に提出している毎年の活動報告書に記載。 FMBB(西バリ式コミュニティファシリテーション手法)について、ガイドブックにまとめ、環境林業省保全地域局および中央研修所に提出された。 西バリにおいてファシリテーターがどのように養成され、いかにして活動を開始し、村人のイニシアティブはどうやって生まれたのか、について当事者から話を聴き、それを記録としてまとめて出版する作業を開始している。
	4-2 西部バリ国立公園で経験を積んだ職員による、他の国立公園への「ピアサポート」を通じた能力育成活動について、報告書にまとめる	ピアサポートの結果については、2016年の活動報告書に記載される予定である。
	4-3 上記2つの報告書を林業省自然保護森林保全総局に提出し、成果をアピールする報告会を開催する	毎年の活動報告書を林業省自然資源生態系保全総局に提出し、毎年1回、保全地域局において西部バリ国立公園のプロジェクトチームによる報告会を開催した。

業務達成状況報告書（2016年11月提出）

別紙・モニタリング報告

- ◆ 事業名：自然と人間の共存を目指し、公園現場事務所を拠点とした、コミュニティ・国立公園協働活動促進手法の深化と普及（インドネシア）
- ◆ 事業実施団体名：一般社団法人あいあいネット
- ◆ 事業実施期間：2012年12月～2016年11月
- ◆ プロジェクト目標：国立公園地域の生物多様性保全と周辺コミュニティの生計向上とが両立する活動が持続的に進められ、協働活動促進の手法がモデルとして確立・普及する

<事業実施中に起きた問題点や阻害要因>

本事業は西部バリ国立公園において周辺村の「自然と共生した生計向上」活動を国立公園と住民や関係者が協働して行うことを促進する一方で、同国立公園での「コミュニティ・ファシリテーション」手法を他の国立公園や自然保護地域へ「ピアサポート」を通じて普及していくことが計画されていた。このうち西部バリ国立公園での活動は順調に推移したが、他の国立公園等への普及については、当初計画よりは進行が遅れ気味となった。これは第一に国立公園側の要因として、西部バリ国立公園も、対象となる他の国立公園（バルラン、メルブティリ等）も、それぞれ固有の活動を抱えており、時に中央から指示された活動や訪問者の受入等も不定期に入ることあり、一定程度まとまった人数がまとまった時間を割いてファシリテーションについて学ぶ機会を、西バリと相手の国立公園が同時に作る、ということが難しかった点がある。一方、もう一つの要因として、当初は西バリで経験を積んだ現場職員が研修講師として他の国立公園で研修を行うことを想定していたが、実際に研修の場をシミュレートしたところ、講師としての技術を習得するのは時間がかかることが判明した、という点がある。研修を行う場合には経験を積んだファシリテーター役をあいあいネット側が務めるとともに、西バリのファシリテーターが自らの経験を共有しながら、現場で助言していく、というピアサポートの形式を確立するために時間がかかった。

西部バリ国立公園周辺村へのファシリテーションは順調に進み、村人のイニシアティブが継続的に生まれている状況で、適切なファシリテーションを行えば村人は自ら動き出すことが証明された。多くの村で複数の住民グループによるイニシアティブが生まれているが、こうした活動が継続し、地域全体としての「自然と共生した生計向上」を進めていくためには、一部の村人グループによる活動ではなく、村全体として取り組んでいけるよう、村の行政を巻き込み、マスタープランの作成や公園とのMOUの締結を目指す必要がある。これについては村人の活動の進展に伴って公園側も徐々にその重要性を認識してきたが、当初計画よりは遅れ気味となった。特に村行政との関わりは公園職員にとっても経験の少ないことで、その戦略を定めていくのに時間がかかった。

<計画通りに行かなかった場合のマネジメント>

ピアサポートの難しさについては、公園現場職員とワークショップを複数回行ってその進め方について考え方の共有を図り、最終的に「第一フェーズ：西バリから相手の公園に向きパートナーシップ構築を図る」「第二フェーズ：パラダイムシフトを起こすために短期間の研修を行う」「第三フェーズ：西バリから経験を積んだ現場職員を派遣して、相手の現場で助言していく」という 3 つの段階を踏む方式が確立された。また相手の国立公園の理解についても時間をかけてお互いを訪問し現場視察を繰り返すことで、所長や課長を含めた相手公園側の FMBB への興味関心を高めることができた。

西部バリ国立公園周辺村での村行政との関わりについては、村長や村役場と良好な関係作りを丁寧に行いながら、手続きに手間と時間がかかる MOU を直接結ぶのではなく、お互いの合意点を文書にする合意書を結ぶ形で進めていくことにした。特に 2015 年以降、公園事務所によるカンムリシロムクの放鳥が順調に進んでいることを受けて、複数の村で飼育下繁殖と放鳥を自らの地域で行うことについて関心が高まっており、プリンビンサリ村ではカンムリシロムクの野生復帰を通じた自然環境保全と観光振興を村と協働して行う方向で合意書締結を進めることができた。

<実際に起こった変化>

まず公園現場職員の変化としては、何よりも「村人と対等な信頼関係を作る」ことの大切さを、研修を受けた職員だけでなく、それ以外の職員も含めてよく理解して、それを実践していることが挙げられる。多くの職員が、村人と同じ目線に立って、村の状況と課題を共に考え、具体的な活動に寄り添っていく、というファシリテーションの基本を実践できるようになった。今では公園所長自身がそ「外からプロジェクトを持ち込むのではなく、上から何かを指示したり援助したりすることもせず、信頼関係を構築して、村人に寄り添うことが重要である」と理解して、それを公園全体のモットーとして進めようとしている。

公園職員の変化でもう一つ興味深いのは、グッドプラクティス事例調査 (GPCS) 参加後の活動である。スラバヤ市のゴミ銀行の活動、ジョクジャカルタの有機肥料作成による有機農業振興、日本の豊岡での地方行政や関係諸団体との協働による地域振興活動、同じく佐渡での住民主体の生息地保全活動は、それぞれギリマヌクのゴミ銀行、スンプルクランポックの農民グループ・畜産グループの活動、ブレレン県とジュンブラナ県行政や民間企業への働きかけ、そして各村の小学校での現場型環境教育活動に活かされている。問題意識をもって他地域他国の事例に触れ、そこから学んだことは、帰国後の自分の現場で活かしていける、ということが言えるのではないかと思う。

村レベルでの変化については、西部バリ国立公園周辺村すべてで自然と共生した生計向上を行う住民グループが数多く結成され、公園と協働して活動が展開している。それらの活動は住民グループ単独ではなく、村や県の行政、民間企業等も巻き込んだ形になっている。そして西部バリ国立公園周辺地域全体の変化として、カンムリシロムクをシンボルにして、自然と共生した地域づくりを関係者全員で取り組んでいこう、という機運が生まれてきて

いる。各村でカンムリシロムクの飼育下繁殖と野生復帰に取り組もうとする住民グループが生まれるとともに、村行政と県や州、民間企業も含めた村の保全観光村としての振興を目指すマスタープラン作りも始まった。

最後に西部バリ国立公園外での変化について。ピアサポートを実施しているグヌンリンジャニ、メルブティリ、バルランの3国立公園では、現場職員たちがFMBBのやり方を学び、村人とのパートナーシップ構築や「あるものさがし」の活動を開始している。特にグヌンリンジャニ国立公園では、トレッキングやポーター、川下りのガイドを行う若者グループや農業者のグループに公園職員が寄り添う活動を行っている。また環境林業省本省では、事業開始前はごく一部の担当者が西バリの活動に関心を示しただけだが、活動の成果が積み重なることで、国立公園を管轄する管理地域局全体の中で、西バリ式コミュニティファシリテーションが高く評価され、自然と共生した地域づくりの取り組みの先進事例として、他の国立公園へ紹介されるようになってきている。FMBBを職員研修の中に取り入れる動きも始まっている。

<具体的なエピソード>

西部バリ国立公園職員15名から、どのように村人のイニシアティブを引き出し協働へと繋げていったか、について聞き取りを行い、その結果を取りまとめ中だが、そこでは職員たちが、いかにして旧来の考え方から脱して、FMBBのアプローチを実践してきたか、そのプロセスが語られている。そこからは、まず「何も村には持ち込まず、約束もせず、ともかく仲良くなって、話を聴き、一緒に考える」というコミュニティファシリテーションの基本を職員たちが斬新なものにとらえたことがわかる。それまではプロジェクトが先あって、村人に何かを配ったり教えたりすることが中心だった。FMBBはそれと全く反対である。果たしてこれでうまくいくのか、多くの職員は最初は半信半疑だった。しかし足繁く村に通い、村人の話を聴くようになると、村人は次第に打ち解け、いろいろな話をしてくれるようになる。そしてある時（場合によっては半年から一年後に）、村人から、「実は〇〇をしたいのだが・・・」と打ち明けられる。村人のイニシアティブが生まれた瞬間である。そこに至るまでに実は多くの時間がかかったのだが、職員たちはそれを「無駄」とは全く考えていない。何より、その後の村人の動きはどの事例での大変迅速で、かつ活発であったからだ。それまでじっくり時間をかけて相手と信頼関係を構築してきたことで、その後の活動の展開にしっかり寄り添うことができている、との自信を多くの職員が持っている。

村人の変化を物語るエピソードは数えきれないほどあるが、印象的なのは、以前は国立公園と敵対していた村人の変化である。スンプルクランポック村でカンムリシロムクの密猟に関与していたD氏は、国立公園職員のS氏、N氏から何度も「カンムリシロムクの飼育下繁殖ができるようになりました。一緒にやりましょう」と聞かされても、なかなか信用できなかった。しかしあまりに何度も足を運ばれて、熱心に言われるので、これは信用してもいいかもしれない、と思い、飼育下繁殖の研修に参加したという。そのD氏は今ではカンムリシロムクの野生復帰を促進しようと頑張るグループの一員であり、密猟に関わってい

た昔のことを苦い思い出として語っている。また同じ村で違法伐採に長年携わっていた S 氏は、公園職員 of D 氏と J 氏が足繁く通ってきても、1 年間は何も反応せず、世間話だけをしていた。生計の話になって、「農業だけでは食べていけないんだよなあ。だから森から木を切って売ってるんだ」とは言ったが、それに対してどうしよう、とは S 氏自身も、公園職員 of D 氏や J 氏も何も言わなかった。そうした中である時、「公園の自然を活用して何ができるかを考える」という集まりが村であったのだが、その時 S 氏は突然立ち上がって、「公園のトレッキングガイドをやりたい。そうすれば、今やっていることをやめても収入を増やせる」と言った。違法伐採者が「元」違法伐採者になり、住民によるトレッキングガイドグループが生まれた瞬間である。その後の S 氏のグループ活動は大変活発で、今ではトレッキング道周辺の整備やゴミの清掃活動を行うとともに、カンムリシロムクの飼育下繁殖と野生復帰にむけて動き始めている。

西部バリ国立公園周辺の村での動きで興味深いのは、若い村人たちが、自分達の地域の良さを認識して、保全観光村として多くの観光客に来てもらいたい、と動き始めたことである。カンムリシロムクの野生復帰とグロジョガン滝エリアの整備を関係者協働で取り組もうとしているブリンビンサリ村の村長、貴重なマングローブ林の再生をテコに観光振興をしようとしているプジャラカン村の住民グループのリーダー、同じくマングローブ林のポート観光とサンゴ礁保全に取り組もうとしているギリマヌク村の漁民グループのリーダーたち、このほかにも、多くの若者が、自らの地域の発展のために動こうとしている姿は、大変印象的である。

<教訓>

「村人とパートナーシップを構築し、何も持ち込まず、話を聴き、一緒に考える」というファシリテーションの基本を身につけて、村人と継続的に関わっていくことで、自然と両立した生計向上活動に取り組もうとする村人のイニシアティブを引き出すことが可能である。そしてこの方式は、西部バリ国立公園だけでなく、他の国立公園・自然保護地域でも必要であり、かつ実践可能である。そしてこのファシリテーション能力は、西部バリ国立公園からのピアサポート（相互訪問、パラダイムシフトのための短期研修、現場での助言）によって他の国立公園・自然保護地域で働く現場職員に伝えることが可能である。

日本を含めて、他地域の事例から学ぶことは有効である。特に自らが直面する課題に意識的であり、何を学びたいかを明確にしている場合には、いわゆる「グッドプラクティス事例調査」は効果的である。もちろん、学んだ後に、それを具体的にどう活かしていくか、アクションプランを立てて、それをフォローすることも重要である。

この「学び」は一方通行のものではない。本邦研修で訪問した豊岡、佐渡、吉野熊野国立公園等では、それぞれで活動する住民グループや行政機関の方々が、西部バリ国立公園での住民との協働をめざした活動について、関心をもち、「自分たちの抱える課題と同じ」「西バリのことをもっと知りたい」という反応を示してくれた。そして佐渡からは 2016 年 2 月に 12 名が西バリを訪れて経験共有を行った。「自然との共生」「地域振興」という同じ課題を

抱える者同士のまなびあいはこれから大いに必要とされている。

そして何よりも大きな教訓として、人は自然と共生した生き方を望んでいる、ということがある。スンプルクランポック村で違法伐採をしていた村人は、「これではいけない」と自ら考えて、トレッキングガイドを始めた。カンムリシロムクの飼育下繁殖を始めた村人たちは、「カンムリシロムクが飛び交う、自然豊かな村にしていきたい」という思いをもっている。どちらももちろん経済的な動機が絡んでいることは確かだが、決してそれだけではない。ギリマヌク村でマングローブ林のすぐ近くにゴミをすてる村人たちも、美しい海岸とマングローブ林が失われることは望んでいない。自分の身近な自然を大切に思う気持ちは誰でも持っている。そして西部バリ国立公園周辺では、公園によるファシリテーションを通じて、「自然と共生した地域づくりと観光振興」を地域全体の目標としてさまざまな関係者が協働して動き出そうとしている。これはインドネシアに限らず、日本も含めて、世界の多くの地域にとって、意味のある教訓（学び）であると考えられる。

<今後の課題>

西部バリ国立公園周辺地域においては、カンムリシロムクの野生復帰を一つのアイコンとして、地域全体を「保全観光地域」として振興していくことが今後の課題である。個々の村での住民グループの動きは活発化し、既に関係者間の協働も生まれているが、それぞれの動きの間の連携はまだ少ない。村全体として、そして地域全体として振興に取り組むには、村行政のイニシアティブでの計画策定や条例の策定、そして複数の村の協働を促進する国立公園の役割が重要である。

西部バリ国立公園におけるコミュニティ・ファシリテーション手法は既に多くの職員に定着しているが、それを公園組織としてバックアップし、継続的に促進していくためには、公園としての予算の獲得や内部組織の整備が必要である。個別のファシリテーション事例の数が多くなり、お互いへの調整が大変重要となっている。既に所長を初めとした幹部職員と、当プロジェクトに関わるプロジェクトチームメンバーはそれを認識し、組織化に向けた動きを始めている。

西バリ式コミュニティファシリテーション手法（FMBB）の他地域への普及については、ピアサポートを開始した3つの国立公園（バルラン、グヌンリンジャニ、メルブティリ）へのフォロー（継続的な助言）が必要である。また環境林業省本省は既に西バリをコミュニティファシリテーションと「自然と共生した地域づくり」のパイロット事例として他の国立公園に視察を進めているが、ピアサポートの他の公園への展開についても本省からのバックアップが得られるよう働きかける。さらにFMBBの手法を職員研修の中に取り入れる可能性についても中央研修所で検討されており、それへのフォローも必要である。

環境林業省は2016年8月に西バリを会場として実施された全国自然環境保全大会において、「住民のための自然保全」を唱えており、国全体の方向性として「自然保護と経済向上の両立」を目指していると言える。これは日本社会の置かれている課題や各自治体の模索する方向性とも類似しており、今後の協力の可能性が考えられる。

<日本の市民へのアプローチ>

本邦研修で西バリからの一行が日本を訪れた際は、訪問先で相手の活動を視察するだけでなく、市民グループや行政の方たちを対象に、自分たちの西バリでの活動について報告する機会を設けてきた（豊岡市、佐渡、吉野熊野国立公園）。また横浜国際フェスタ（2015年）およびJICA 横浜の会場（2013年、2014年）、あいあいネットの移転先である関内フューチャーセンター（2016年）を使って西バリの活動報告も行っている。さらにあいあいネットが参加した地域の催し（生田緑地を会場としたフェスタ等）でも西バリの活動写真を展示して、カンムリシロムクをテーマに子ども参加の企画も行った。またあいあいネットの作成する年次報告やニュースレターにも毎年報告を載せる他、日本インドネシアネットワーク（JANNI）が発行するニュースレターでも西バリの活動を紹介した（2013年3月）。さらにあいあいネット代表が教員を務める明治大学専門職大学院ガバナンス研究科の紀要でも西バリでのファシリテーション事例が紹介されている（2016年3月）。

上述のように2016年2月には佐渡でトキの生息地保全等に取り組む市民12名が西バリを訪問して経験交流を行った。ここでは西部バリ国立公園職員から現地での活動を紹介されるとともに、スンプルクランポック村、ギリマヌク村、プリンビンサリ村を訪問して住民グループと交流した。国立公園所長と佐渡の市民グループリーダーは、「自然と共生した地域を作っていくためには、我々全員の考え方の変革が必要だ」と意気投合した。また佐渡の人たちは、自分たちの取り組みが世界的にも重要なことであり、西バリにも志を同じくする住民や公園職員がいる、ということで活動のエネルギーをもらったようだ。

この他にも、兵庫県豊岡市や横浜市で自然と共生した地域づくりに取り組む市民グループと西バリとの交流が生まれており、今後はそうした地域とも学びあいの活動を展開していくことが期待できる。

以上